

「ひあぁッ♡♡！！！」

男は隣の男と同じように、赤ん坊のように胸に吸い付いてきた。

ちゅうっと吸われ、また躰がビクンッ^{しな}と撓るほどの刺激が駆け下りる。そうなると腰が仰け^そ反って、啞えられたままの幼茎を、足元の男に向かって突き出すような形になってしまう。

「あぁあ”あッ♡♡♡♡」

それに応えるように、じゅっと竿を吸い上げられた。

あまりに強烈な快感に、一瞬気が遠のく。

続けて硬くなった竿を、れろれろと味わうように舐めとられる。

なにこれ——なに…これ——……

両乳首と竿とを同時に吸われ舐められ、どこにどう集中したらよいのかわからない。どの場所からも絶え間なく刺激を送り込まれ、抑えようとしてもびくびくと躰が跳ねてしまう。

霞みがかった頭のまま、ふと鏡が目に入る。

蝶の死骸に幾多の虫がむらがっているような光景がそこにあった。

少年が身を躍らせるたび、垂れ下がった^{すそ}裾とも^{たもと}袂ともつかない布がひらめいて

いて、そんな比喻が浮かんだのかもしれない。

鏡の中の光景に生理的な嫌悪を覚えると同時に、それを上回る何かを感じるのは気のせいだろうか。

「ああ…っ…♡あああ…っっ♡、♡」

鏡の中の少年が、熱に浮かされた表情で喘いでいる。

あんなの自分じゃない、自分なわけない——

見るたびに羞恥を煽られる鏡の中の自分から、なぜか目が離せない。

「…っ！？ああ…ッ…っ、♡♡」

身を跳ねさせるたびに引き締めてしまう後孔。

ますます強くなる孔内のびりつきが、乳首や竿からの刺激と妙な繋がりを持ち始めている。

これ以上、この棒を締め付けてはいけない——

直感的にそう思うのだが、敏感になった胸と竿とを思い思いに^{なぶ}舐られていると、どうしても腰が跳ねて孔を引き締めてしまう。

「んう…っ♡、あああ…♡♡ああ……っ♡」

孔内の肉襞が、奇妙に蠢^{うごめ}いている。

そのたびに、蓮芋の茎がみちみちと寄り合わされてできた独特の凹凸^{おうとつ}をなかで感じてしまう。

棒ずいきの存在をまざまざと感じさせられるごとに、鏡の中の少年の表情^{かお}はとろけていく。

違う、あんなのは自分じゃ——……

「ああッ！、」

唐突に棒ずいきを抜き取られる。

加減もなくずぽっと抜かれ、なかを勢いよく擦られた驚きにまた腰が跳ねてしまった。

「本当に、今年の贅は素質があるなあ？」

棒を抜き取った背後の男が言う。

躰の前側は三人の男たちに責められ続けているから、四人目が加わったことになる。

「お清めも慣らしも済んだし、もうお供えの段階に入ってもいいよなあ？」

「ひ…っ！、」

歳若い男の声に肩口で囁かれ、棒を抜かれたばかりの孔に触れられる。

「…ッ！……うそ……、いや……、」

それは指でも棒ずいきでもなかった。

ぬち、と小さな水音が響いて、熱い塊が押し込められる。

「い…っいやあ……！！！！」

恐怖が頂点に達し、叫び立てる。

尻と太腿が勝手にがくがくと震えている。その震えを押しえつけ固定するかのよ

うに、背後の男は少年の腰骨をつかんでくる。

少年は木製の踏み台の上に乗せられているので、男たちとの腰の高さがぴったり

り合う。男は苦も無く、ゆっくりと腰を深めてきた。

「あ……っああ……いや…、いやあ……、…っ」

いざずぶずぶとそれに沈み込まれてくると、叫ぶどころではなかった。

指や棒ずいきでも大きいと感じたのに、それ以上に長大なものに貫かれている。

狭い孔をみりみりと拓^{ひら}かれる感覚に、全身が栗立った。小刻みに軀を震わせながら、蚊の鳴くような声を漏らすことしかできない。

「かなり濡れてるね？棒ずいきのおかげかな」

そう言って後ろの男がふふ、と笑う。

「……あ……あ……、……、」

あまりの圧迫感に、息が詰まる。

凶器的に凶太いものを咥え込まされ、せめてしっかりと踏ん張りたいのにそれもできない。片足を吊られた体勢はひどく不安定で、下半身にまったく力を入れられない。男の手に掴まれた腰の位置だけがしっかりと固定され、軀の中で唯一の支点となっている。そこを猛^{たけ}る肉杭でゆっくりと串刺しにされることほど、恐ろしいことはなかった。

凶太い幹のようなそれは、どくどくと少年とは異なる脈動を刻んでいた。まるで何か得体のしれない生物に、体内を蹂躪されているような気持ち悪さだ。けれど同時に——孔内を進まれるたび、どこか懐かしさに似た、切ない感覚を内壁が拾い上げはじめもいる。

「君のなか……、狭くて、…すごくいいね……」

吐息混じりに肩口で囁かれる。

そんなこと言われたって、不快なだけのはずなのに——

すごく大切な何かを褒められたときのように胸が疼くのは、どうしてなのだろう。

恐怖のせいではない、何の涙なのかわからない涙が込み上げていた。

「……や……やめ……、」

これ以上続けられたら、自分が自分でなくなってしまうようだ。

辺りの甘い匂いが濃くなっている。蔵を締めきっているから、香りが充満しているのだろうか。

少年が細い声で抗議するも、やはり男たちは聞き入れない。

胸や竿を弄られる快感と、襞を押し拵げられ挿入^{はい}ってこられる圧迫感。それらが体内で奇妙に溶け合って、言い知れぬ焦燥にかられる。棒ずいきの残していったピリピリとした感覚も相まって、孔全体が熱っぽい。

「ああ…ッ、！」

最後は狭く深い場所に勢いをつけてねじ込まれた。

楔を打ち込まれた孔奥が、灼けるような鈍痛を訴える。

けれどそれで終わりではない。

「……っ……、…?!、」

奥深くに突きさされたまま両乳首をぬるぬると舐められ、熱い股間をじゅぽっ、じゅぽっ、と丁寧に吸われていると、孔奥の鈍痛がふいにうねりをあげはじめた。ざわり、と腰を中心に鳥肌が立つ。

痛みがじんじんとした痺れに変わったかと思うと、いつの間にかうずうずとした痒みのようなもどかしさに変化する。

「…あ……ああ……………、…、」

どくん、どくん、とうるさくなっていく脈動は、肉洞のなかの男のものだろうか、それとも自分のものなのだろうか。

圧迫感に乱れる息が、さらに熱を帯びていく。

少しも動きたくはなかった。少しでもなかで男のものと褌とが擦れ合うと、^{たかぶ}昂っている未知の感覚がさらに大きくなるような気がしたから。

けれど鼓動が高鳴り呼吸が乱れるなか、微動だにしないというのはなかなか困難なことだった。

それに――

「ああっ…いやあ……っ、…♡、」

乳首や幼茎を、まるで甘い菓子でも味わうように口に含まれ続け、また腰がびくびくと跳ねてしまう。なかの男をひくっひくっ、と内壁が締め付けてしまって、腹奥で奇妙なもどかしさがつのる。

同性の大人たちにこんなことをされているというのに、この脳を侵すような甘い香りのせいなのか——危機感も嫌悪感も、徐々に薄らいでいく自分が恐ろしくてならない。

「……気持ちよくなってるでしょ？」

少年の孔のひくつきを直接感じ取っている背後の男には、何もかもが筒抜けだった。耳元に^{かが}屈まれあやすような口調で囁かれると、この行為をそこまで拒否しなくてもいいような気さえしてくる。

「ちよつとずつ、動くからね」

「…ッあああ……………！、」

男のものは大きすぎて、ずる、と引き抜かれる感覚につられて少年の腰も揺れ動く。孔内は尋常でない異物感に、完全に濡れきっていた。男が^い入り口へゆっ

くり引き戻っていくぬるぬるとした感覚から、それが如実に伝わってくる。

「…あつ…あああ…つ…、…、」

そうにゆう
挿入されるときもつらかったが、抜かれるのは抜かれるので別のつらさがある。

一度こじ開けられて敏感になった場所を、再び隆々とした筋肉のような凹凸おうつがこそげるように通過する。その感覚がぞくぞくとした痺れを背骨に伝えて、びくッびくッと大袈裟に腰を跳ねさせてしまう。

「躰……、い好い感じになってきたね」

再び背後の男に囁かれる。

屈辱でしかないはずの言葉が、とろりとした蜜のように耳に流れ込んでくる。

「…つあ……、」

最後に肉環を大きく雁首が拵げ、完全に幹が出ていく。

けれど一呼吸も間を置かず、

「ああッ…つ！？、」

再び男がゆっくりとそこを割り^{ひら}拓く。

また同じ大きさに^{ひら}拵げられる入り口。

ぬちゅ、と先程よりも少し大きな水音が響いた。

「…あ……、だめ…、だめ……、……、」

躰が小刻みに震え続けている。

腹奥にわたかまるぞわぞわとした感覚を、これ以上刺激されてはならない。それだけははっきりとわかって、あまり孔内に意識が向かないよう先程から^{つと}努めているのだが——男のものの存在感は凄まじかった。

二度目の^{そうにゅう}挿入でも、やはり大きすぎると感じる。長大な形を改めて味わわされ、とろけかけた意識にまた恐怖が戻ってくる。

こんなものを、こんな狭い場所に^{いれ}挿入ていいはずがなかった。

「……あ…、あ………、」

ゆっくりと奥へ^{はい}挿入られて、また息が詰まりそうになる。

ぶるぶると勝手に下半身がわななく。

「あぁッ！、」